

日本医師会

おかげ賞

かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介



主催 日本医師会 / 産経新聞社

後援 厚生労働省 / フジテレビジョン / BSフジ

特別協賛 ジャパンワクチン株式会社

日本医師会

赤ひげ大賞

目 次

- 3 第2回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要
- 4 主催者挨拶 日本医師会 会長 横倉 義武
- 5 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 熊坂 隆光
- 6 協賛社挨拶 ジャパンワクチン株式会社 代表取締役社長 長野 明
- 7 第2回 表彰式
- 受賞者紹介
- 12 下田 憲 (北海道)
- 17 野村 良彦 (神奈川県)
- 22 小鳥 輝男 (滋賀県)
- 27 大岩 香苗 (兵庫県)
- 32 白石 吉彦 (島根県)
- 37 第3回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要
- 38 経過報告



第2回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催となり「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、ジャパンワクチン株式会社の特別協賛、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援の下、平成24年に創設されました。各都道府県医師会から1名の候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第2回「日本医師会 赤ひげ大賞」の受賞者5名が決定しました。

- 主 催** 日本医師会、産経新聞社
- 後 援** 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
- 特別協賛** ジャパンワクチン株式会社
- 対 象 者** 日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師。
ただし、現職の都道府県医師会役員は除く。原則として、70歳未満の方を優先。
- 推薦方法** 各都道府県医師会会長が1名を推薦
- 推薦基準**
- 過疎の医療現場、特にへき地や辺地、離島などで、住民を支えている医師
 - 障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるような活動を行っている医師
 - 地域における学校保健活動、公衆衛生活動を通じ、特段に地域住民の健康管理を推進している医師
 - 医療環境整備や社会活動を通じてまちづくりへ貢献している医師
- 選考委員**
- 羽毛田 信吾 (昭和館館長、宮内庁参与)
向井 千秋 (宇宙航空研究開発機構特任参与)
山田 邦子 (タレント)
小林 光恵 (作家)
原 徳壽 (厚生労働省医政局長)
外山 衆司 (産経新聞社専務取締役)
河合 雅司 (産経新聞社論説委員) 他日医役員等

日本医師会 会長

横倉 義武

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域医療の現場で長年にわたり地域住民に寄り添い地道に尽力されている「現代の赤ひげ先生」にスポットを当て、その功労を顕彰することを目的として、日本医師会と産経新聞社の主催のもと、ジャパンクチン株式会社の多大なるご協力をいただき、平成24年に創設したものです。

「赤ひげ大賞」という名称ですが、その由来は山本周五郎の時代小説「赤ひげ診療譚」にあります。黒澤明監督が映画化したことでご存知の方もいらっしゃると思いますが、「赤ひげ先生」と言えば、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージを思い起こす方も多いのではないのでしょうか。

この「赤ひげ先生」の实在のモデルは、江戸中期に貧民救済施設である小石川養生所こいしかわ ようじょうしょで活躍した小川篁船おがわしゅうせんと言われていますが、病に苦しむ人がいれば何としても助けたいというのが医療人の願いであり、医療の本質は当時も今も変わりありません。

医師には、患者さんを前にした時、その方に寄り添い、同じ目線で治療に当たることが求められています。そのためには、私どもが行っている医療というものが、医療提供者である医師を始めとするさまざまな医療関係者の方と、医療をお受けになる患者さんとの信頼関係に基づいた協働作業でなければなりません。

今回、受賞された5名の先生方は、いずれも各地域において、献身的な医療活動を通じて患者さんの治療に携わっている方々であり、まさに「現代の赤ひげ先生」と呼ぶにふさわしいご活躍をされていらっしゃる方々ばかりです。

2025年には、日本の経済成長を牽引けんいんしてこられた団塊世代の方々が後期高齢者となり、高齢化のピークを迎えます。それまでに残された時間はわずかに11年しかありませんが、その間に、かかりつけ医を中心とした医療と介護が連携する地域ネットワークづくりを進めていくことが、われわれに課せられた使命であると考えています。

また、かかりつけ医には、今後、疾病の早期発見・早期治療、生活習慣の改善による疾病予防ばかりでなく、高齢者の方々が生活を営むための機能の維持等、健康寿命を延ばしていくことも求められており、地域住民の方々に寄り添った形で医療を展開している赤ひげ先生の役割がますます重要になってきます。

日本医師会としましても、「国民の生命と健康を守る専門家集団」として、「必要とする医療が過不足なく受けられる社会づくり」を目指し、さまざまな事業活動や国への働き掛けを行って参る所存しておりますが、本日お集まりの皆様方にも、ぜひ、全国の赤ひげ先生が今後も活躍出来るよう、なお一層のご支援・ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。



産経新聞社 代表取締役社長

熊坂 隆光

受賞者の皆様、ならびにご家族の皆様、本日はおめでとうございます。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、日本医師会と産経新聞社が共同で、地域に密着して人々の健康を支えている医師の方々の功績を称えるとともに、広く国民の皆様にも地域医療の大切さを改めてご理解いただくことを目的に創設しました。

受賞された皆様は、地域社会の中でなくてはならない存在として多くの信頼を集め、地域住民の健康を支えられています。医療資源の乏しい閑散地で24時間献身的な医療活動により地域の健康・医療を支える先生。都市部の過疎地で「かかりつけ医」として幅広く高齢化する患者のニーズに対応され、地域医療に多大な貢献をしている先生。「医療機関」、「患者」、「地域」の良好な関係を実現させるため、立場の違う医療従事者をまとめて、患者さんにとって最善の方法を模索するための組織を実現している先生。女性医師で外科医という貴重な存在として、地域の乳がん検診を一手に引き受けるだけでなく、障害者、高齢者の方が不安なく生活出来るよう努力を続けている先生。離島における唯一の病院の院長としてリーダーシップを発揮し、同院のスタッフとのチーム医療を実現し、住民から厚い信頼を寄せられている先生など受賞者の先生方が実施されている医療の根幹を成す「地域医療の充実」こそ、高齢化が急速に進む日本にとって必要不可欠なものであると言えます。

わが国の成長戦略として、「医療分野」はよく取り上げられています。世界を圧倒する日本の医療技術、制度だけではなく、受賞者の方々のような、誰もが安心して暮らせる「かかりつけ医」がいて初めて世界に誇るべき「日本の医療」は成り立つものなのだと思います。

今回の第2回「日本医師会 赤ひげ大賞」の受賞者の皆様は、「現代の赤ひげ」と言うべき地域に根ざした活動に従事されており、献身的な日々の活動は、まさに「日本の力」です。

私ども産経新聞社は、報道機関として、日本の医療の充実、ひいては国民の健康増進の一助となるべく、これまで以上に邁進していく所存であります。



ジャパンワクチン株式会社 代表取締役社長

長野 明

第2回「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞されました5名の先生、また、赤ひげ先生を支えて来られたスタッフ、ご家族、関係者の皆様、誠におめでとうございます。

受賞された皆様は、僻地、あるいは離島といった大変厳しい立地条件下での地域住民への献身的なお取り組みや、女性外科医師として地域の医療、保健全般に渡る地道なご努力、そしてより進化したチーム医療体制の展開に向けた工夫をこらしたお取り組みをされて来られました。

かかりつけ医とは、診療を核としつつも、地域住民の生活、心の支えといった存在であることを確信いたしました。皆さまが地域住民と共に歩み、地域住民の健康を第一義に考えられた診療活動を、献身的に展開されておられますことに感銘を覚えますと共に、心より敬意を表します。

私共ジャパンワクチンは、「力をあわせて、未来を守る」をコーポレートスローガンとしております。日本全国、どちらの地域におかれましても、かかりつけ医の先生を中心に医療関係者の皆様が力を合わせ、地域住民が安心を感じる地域社会の実現に尽力されることに、ジャパンワクチンはお力添えをして参りたいと考え、特別協賛をさせて頂いております。

全国の赤ひげ先生、そしてこの「赤ひげ大賞」の存在を、国民の皆様にも広く知って頂き、地域医療の充実や理解促進に繋がることを期待いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。



第2回 表彰式



「日本医師会 赤ひげ大賞」の第2回表彰式は3月28日、東京・内幸町の帝国ホテルで開かれた。

来賓の安倍晋三首相は「わが国はこれから高齢化が進み、医療に対する期待はますます大きくなる。皆さまの受賞は、全国で日夜黙々と地域医療に携わる医師の励みとなる」と祝辞。受賞者5人と笑顔で握手を交わした。

続いて、日本医師会の横倉義武会長、産経新聞社の熊坂隆光社長から5人に表彰状と記念品を贈呈。受賞者代表として挨拶した野村良彦医師は、かかりつけ医、地域医療、在宅医療の3つをキーワードにしてきたこれまでの振り返り、「地域の人ができる医療を続けていく」と抱負を語った。さらに、ドラマ「赤ひげ」の脚本を担当した倉本聰さんが特別講演し、これまで出会った医療者や患者のエピソードを披露した。

表彰式後に行なわれたレセプションでは、特別協賛であるジャパンワクチンの長野明社長が「地域住民とともに歩んできた皆さまに敬意を表する」と受賞者を祝福。選考委員を務めた昭和館館長の羽毛田信吾宮内庁参与らも駆けつけ、笑顔で受賞者と歓談した。

内閣総理大臣

安倍 晋三

本日、栄えある「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された皆様、誠におめでとうございます。また、支えてこられた家族の皆様にも感謝申し上げます。

受賞者の皆様は、それぞれの地域において、長年にわたり献身的に医療活動に従事して来られた「地域になくてはならない存在」であると、うかがっております。

今、地域医療に求められているのは、単に病気を治すだけではなく、地域の皆さんが健康面で安心して暮らせるよう、何でも相談できる「かかりつけ医」の存在であると思います。

今回、受賞された方々の中には、過疎地や離島で24時間、身を粉にして住民の健康を守ってきた方、組織を超えた専門家のネットワークを確立した方、チーム医療の先頭に立って病院を牽引^{けんいん}されている方もいらっしゃると思います。

「地域医療を守ろう」という皆さんの崇高な使命感と行動力は、まさに現代の赤ひげ先生であると思います。

わが国は、医療界の皆さんの多大な貢献もあり、国民皆保険制度の下で他国に例を見ない長寿大国を確立して参りました。

こうした日本の財産というべき「医療」をさらに発展させるべく、政府は現在、医療を成長戦略の大きな柱として位置付けてもおります。

最新の医療技術や医療機器の開発など最先端の医療を目指すことも重要ですが、何よりも国民のそばに寄り添う皆様のような「かかりつけ医」の存在を抜きにしては日本の医療は成り立ち得ません。

わが国は、これからさらに高齢化が進みます。国民の医療に対する期待もますます大きくなります。住み慣れた地域で自宅で暮らし続けたいと願う人たちにとって、地域で活躍する「かかりつけ医」の存在は更に重要なものとなっていくことでしょう。

皆様の受賞は、全国で日夜黙々と地域医療に携わる医師の方々の励みとなることだと思います。

政府としては、地域医療をさらに充実させていくべく、努力してまいります。そうした意味においても、地域に密着して住民の健康を支える医師を顕彰する「赤ひげ大賞」の意義はとても大きなものがあります。「赤ひげ大賞」がますます発展せんことをお祈り申し上げます。



厚生労働大臣

田村 憲久(代読 村木厚子厚生労働事務次官)

本日栄えある表彰を受けられる五名の皆様に対し、心からお祝いを申し上げます。

受賞される皆様は、離島、へき地など医療の確保が困難な地域における医療活動、高齢者や障害児に対する医療や交流の場の提供等を通じて、住民の皆様が安心して生活をおくれるようなまちづくりに多大なる貢献をされました。これまで、それぞれの地域で住民の健康が守られてきたのは、まさに皆様の地道で継続的な活動があったからにはほかなりません。改めて皆様の日頃のご努力に深く敬意を表します。

日本の医療は、地域や診療科間の医師不足や、勤務医を中心とした厳しい勤務環境など様々な課題を抱えています。また、今後、高齢化により、更に医療需要が高まると考えられることから、それぞれの地域で必要な医療を確保していくためには、医療機関の機能分化・連携による効果的かつ効率的な医療提供体制の構築が必要です。

厚生労働省としては、急性期から在宅医療・介護までの一連の医療サービスを地域において総合的に確保するため、病院・病床の機能分化と連携の推進、在宅医療の推進と介護の連携強化等を内容とする医療・介護サービス提供体制の制度改革に取り組んでおります。その実現のためには、地域医療の第一線で活躍される、全国の「赤ひげ」の皆様のご協力が不可欠です。皆様には、地域医療の発展のため、今後ともなお一層のご尽力をいただきますようお願い申し上げます。

今後一層の発展とお集まりの皆様のますますのご健勝を祈念して、私の挨拶といたします。



参議院議員

羽生田 俊

受賞されました5人の先生方、そのご家族の皆様、おめでとうございます。私は、この賞を創設したときから、日本医師会の副会長として、たずさわらせていただきました。第1回の表彰式は、審査員として出席させていただきました。創設にあたっては、「赤ひげ大賞」というと男性を想起させるなどの議論がございましたが、今回の第2回に女性の先生が受賞されたのは大変うれしいことであります。本日、受賞された皆さんは、本当に地域に根差して、というよりも、むしろ「地域にはいつくばって」住民の方々のために医療をされてきた先生方だと思います。今後も、一人でも多く、こうした医師の皆さんが、日本の国民のために働ける態勢を、私どもが作っていかなくてはならないと思っております。



脚本家

倉本 聰

(NHKドラマ「赤ひげ」の脚本を執筆)



北海道富良野市に、もうかれこれ30数年住んでいますが、最初に移ってきたとき、まちを歩いて病院を探しました。永住するつもりだったので、自分はどのような病院で死ぬのだろうか、という思いで病院を見て歩きました。

当時、富良野には、協会病院という病院が一つだけありました。そして、富良野から車で30分くらいの幾寅(南富良野町)に、今回受賞された下田憲先生がおられて、みんなから頼りにされているというお話をうかがっておりました。

北海道は、何せ広いですから、病院に行くのが一日仕事になります。農家の方なんてはるばる遠いところからやってきて、長い時間待たされた末、いろいろ検査されて、血液を採られて、レントゲンをとられて、そして、お薬が出て一日が終わりという…。何か非常に人間味がないような感じがします。

お年寄りの方々が、こんなふうに訴えているのを聞きました。「どうして、最近のお医者さんは触ってくれないのだろう」。私もそろそろ80歳なのですが、まったくその通りだと思います。

山本周五郎さんの原作をもとに、ドラマ「赤ひげ」(1972年、NHK)のドラマを書くことになったとき、「赤ひげ」の定義とは、一体何だろうと考えました。当時、私の主治医で、「赤ひげ」と呼ばれていた先生が常々こう言っていました。「医者とは病気を診ることよりも、患者を診ることが大事なんだ」。その通りだな、という気がしました。

赤ひげの舞台である小石川養生所には、若い医師がいます。彼は理屈で取り組もうとします。ところが赤ひげは人情的呢喃です。この対比が赤ひげというドラマの根本じゃないか、と思っています。いくら科学が進歩しても、感情の問題は変わりません。患者に触って慰めてくれるということが大事だと思います。科学的というより生理的に考えて人と接して下さるお医者さんがいっぱいいてほしいと思います。

北海道医師会 会長

長瀬 清

昨年の第1回るとき、北海道医師会から推薦させていただいた松田好人先生が大賞をいただきました。今回は2回目なので、少し遠慮していたのですが、「そういうことに関係なく推薦を」ということでしたので、下田憲先生を推薦しました。下田先生は表彰式に、羽織袴で来られましたが、実は背広を持っていません。いつも作務衣で過ごされていて、学会に出てくるときでも作務衣で来られます。本当は、表彰式も「作務衣で来たい」ということだったようですが…。



先生は本当に町民のために一生懸命尽力しておられます。医療ばかりではなくて、心に響くようなことばや音楽で癒しをするなど、そういうことを日常の生活のように行っています。

富良野市に住んでおられる倉本聰先生も、北海道は地図の縮尺が、本州や四国と違うのではないかと、というくらい地図上で感ずるより広いというお話をされました。そして、北海道の医療についてのお話を聞かれた皆様は、北海道の医療があまりよくないような印象を持たれたかな、と少し心配もしておりますが、北海道は、下田先生に見られますように、本当によい医療を提供していると思っています。

下田先生の診療をしている地域は、幾寅(南富良野町)というところですが、ご存知でしょうか？ ここは、高倉健さんの主演映画『鉄道員』の駅です。あの映画に出てくるようなところで仕事をしているのが下田先生です。「赤ひげ大賞」にふさわしい、そういう医療を提供している先生です。そのほかの4人の先生方も非常によい仕事しておられます。これらの先生は、大勢いる医者の中のほんの一部の先生です。本当のところは、推薦された先生方全員に賞を差しあげたいと思っているほどです。この賞が続いて、もっと多くの先生が顕彰されることを願います。

心を治すカウンセリング

下田 憲

(北海道)



(宮川浩和撮影)

しもだ・けん けん三のこば館クリニック院長。昭和22年、埼玉県生まれ。66歳。北海道大学医学部卒。国立長崎中央病院、離島の公立病院勤務、北海道厚生連山部厚生病院院長を経て、平成16年、けん三のこば館クリニックを開設。



クリニックにある言葉のひとつひとつに立ち止まってしまう

JR富良野駅から単線の汽車で約50分、北海道のほぼ中央に位置する南富良野町幾寅。高倉健の主演映画「鉄道員(ぼっぼや)」の撮影地として知られ、幾寅駅よりも映画で使われた名称「幌舞駅」の表示の方が大きい。今でも観光客が訪れるが、町自体は人口2800人を切る過疎の町だ。

下田憲医師が、この地に「けん三のこば館クリニック」を開業したのは、平成16年のこと。「生きたお金の使い方をしたかった」と話すように、建物はもともと町の人が集まって小さなイベントを開けるようにと下田院長が私費で建てたもので、「けん三のこば館」と名付けていた。

ところが、それまでいた町の診療所を後継に譲り、こば館の建物を利用して医院を開業することになった。「だからスポットライトのある不思議な医院なんですよ」。建物の名前も引き継ぎ、知らない人には「『言葉の訓練をしているところですか』と聞かれたりもします」と楽しそうに笑う。

患者の「心の声」

「ひたすらに耐え、ひたすらに待つというとても深い愛情が有る」

「憎み合ういばい合う時、何かがほろびる。愛し合い、ゆるし合う時、何かが生まれる」

ユニークな医院名の通り、建物に一步入ると、もうそこから下田院長の言葉があふれる。診療所のいたるところに、言葉が掲げられているのだ。

「患者さんとの触れ合いでいただいたもの」と話すように、壁に掲げられた言葉はすべて患者の「心の声」だ。「読みながら、泣いて帰る人が何人もいる。すべてを自分に置き換えているんでしょね」

言葉は1カ月に2度換えている。月曜日の朝3時に起きて墨をすり、前の日までに整理しておいた言葉を4時ごろから書き始める。「患者さんの言葉をメモしておいて、その心を言霊に換える。いい言霊



子供たちもみんな下田院長を頼っている



どこまでも気軽に往診に行く



下田院長は白衣ではなく、白の作務衣を着て治療を行う



この笑顔に患者はさらに安心する

に換えることができたときはうれしいですね」と笑顔を見せる。

下田院長は言葉を書くだけでなく、診療所の7カ所に置く生け花も自分で生ける。それだけで1時間半もかかるそうだが、「患者さんも楽しみにしているので」ずっと続けている。「患者さんを2時間待たせることもあります。言葉と生け花のおかげでしょうか、不満を言う人はいませんね」

目指すは「安上がりの医療」

下田院長の治療方針は名刺に自筆で記されている。「悪い薬は用いません。悪い治療も選びません。体を癒すだけでなく、心の癒しもめざします」。東洋医学と西洋医学を併用し、目指すは「安上がりの医療」だ。

その方針に従い、毎日40人ほどの患者に無償で行っているのが鍼治療だ。手間と鍼の材料代は

かかるが、「よけいな薬を使わずに済むので、アレルギー疾患にも鍼治療を行っています。薬の副作用がなく、何よりも安価で良質な医療を提供できます」とその理由を話す。

心の傷はカウンセリングで治す。心の病は薬では治せないと考えているからだ。下田院長自身、若い頃に虐待された経験があるという。そうした経験もカウンセリングに活かされており、訪れるさまざまな人からじっくりと話を聞く。評判を聞いて、患者は全国から訪れる。「よそから来る人には心の傷を持つ人が少なくない」といい、診察の予約は2カ月待ちになっている。

もともと下田院長は在宅医療の〴〵走り、ともいえる存在で、テレビのドキュメンタリー番組でも紹介されたことがあるほどだ。以前いた診療所では、120人の在宅患者を抱え、午後はすべて往診に充てていた。

今も乳児から98歳までを診て、気軽に往診も行



下田院長はアコーディオン演奏の慰問も続け、みんなが楽しみにしている

う。「ここでやれることをやる。救急を作らないようにきちんと管理し、必要に応じて入院施設のある病院につなぐ」。自らの役割をそう心得ている。

アコーディオンで慰問も

トレードマークは、20年以上前から着ているという作務衣だ。治療のときには白の作務衣に身を包む。洋服は持っていないため、「悪いことはできない。どこに居ても目立つから」と笑う。

休日には趣味のアコーディオン演奏で近所の老人ホームに慰問を続けている。もちろん作務衣姿のままだ。

腕前はプロ級。「大学生のころは1200曲暗譜し、これで生活していた。今でも楽譜を見れば大丈夫」というように、学費や生活費を稼ぐために歌声喫茶で毎晩演奏していた。現在もアコーディオンを7台持っており、毎日1時間の練習は怠らない。だから、リクエストがあるとすぐに応えることが

できる。

「下田先生の温かい演奏を聴いた」という声が聞こえる。そんな声がうれしく、自らもとても楽しんで演奏している。重い楽器を抱えるので、健康法でもあるのだという。

幾寅に開業して丸18年。医院のなかにある「屋根裏部屋」に一人で住んでいる。ここ幾寅を終の棲家と決め、体が動く限り診療を続ける覚悟だ。

「今、とても満足している。目一杯の医療をやっているから」。下田院長はしみじみとそう話す。一方で、「患者さんが慕ってくれる。こんないい生活をして許されるのか」と思うほど幸せを感じている。だからこそ、「自分に思い上がりがいいか、問い直している」と自らを戒めることも忘れない。

「死ぬまで、どれだけ言葉を残していけるかな」。取材の最後にそんなことを口にした。下田院長が診療を続ける限り、患者の「心の声」はこれからも無限に増え続けるに違いない。（松垣透）

「病気」だけでなく「人」を診る

野村 良彦

(神奈川県)



(瀧 誠四郎撮影)

のむら・よしひこ 医療法人癒しの会野村内科クリニック院長。昭和21年、京都府生まれ。67歳。日本大学医学部卒。同大助手、横須賀市立市民病院呼吸器科長などを経て、平成7年に野村内科クリニック開業。現在、横須賀市医師会地域保健対策委員会の委員長も務める。

患者の生活や性格までも把握した全人的な医療を掲げ、外来診療から在宅医療まで幅広い現場で地域医療を支えている。「病気だけを診るのではなく、病気を持った『人』を診る」という信念を持ち、患者だけでなく、その家族にも寄り添う姿勢は、地域住民から絶大な信頼を得ている。

13年間務めていた横須賀市立市民病院を離れ、同市内に野村内科クリニックを開業したのは平成7年。市民病院時代に約600人分の死亡診断書を書いたが、「本当は家で死にたかつたんじゃないか。それを病室で選択肢のないまま看取っていたのではないか」と疑問を感じたことが開業のきっかけになった。

在宅医療は午前の診察が終わった後、午後から医院を中心に半径7^キ以内の範囲で1日6人程度を巡回している。患者の自宅だけではなく、特別養護老人ホームに出掛けることもある。野村内科クリニックの所在地は三浦半島の西側で、この地域

は細い道や坂道が至るところにあり、公共交通などを利用するのが難しい人も多い。そのため、この地域の医療を支える上で、欠かせない存在となっている。

何気ない会話で安心感を

受け持っている患者は現在約100人にも上る。「人工呼吸器を付けた2歳の女の子から、100歳を超える高齢者まで幅広いですよ」。症状もさまざまな数多くの患者を診ることは体力的にも厳しく、豊富な経験がなければできないことだが、その表情は全く苦勞を感じさせない。

「天気良いですね。だいぶ涼しくなりましたね」。訪問先の家庭で聴診や血圧測定などの診察をする際には、患者に優しく声を掛ける。この日訪れた93歳の女性に「年おいくつになりましたか」と手を握りながら尋ねると、「忘れたわ」と冗談交じりの返



患者と接するときはいつも穏やか。患者からも笑みがこぼれる



ときには患者の手を取って優しく語りかける



「在宅医療は入院医療の出前ではなく、生活に即した医療」。患者の生活や性格の把握にも努めている

事が返ってきた。何気ない会話で患者に安心感を与えることも、かかりつけ医の重要な仕事だという。帰り際、女性は声を振り絞り、「ありがとう」と見送った。

訪問先では患者の生活状況を家族から聞き取るようにしている。その根底にあるのは、「どういふ所で寝起きしているのか、どうやってトイレに行っているのか。在宅医療は入院医療の出前ではなく、生活に即した医療をすること」という考えだ。

自然に会話が生まれ、家族からの悩み相談を受けることも多い。93歳の母親を診療してもらった次女(67)は「病気のことだけじゃなくて、介護の相談もできるのが助かります。良いお医者さんに巡り合えた」と喜ぶ。

診療所を閉めているときでも、電話は自分の携帯電話に転送される。24時間いつでも対応できるようにすることで、患者やその家族に安心感を与えるためだ。

患者の家族から厚い信頼

専門的な治療が必要な際は、皮膚科、泌尿器科などの別の医院に往診を依頼する。地域でお互いに連携して支え合うネットワークができてきているといい、目標としている地域完結型の医療が形になってきている。開業してから5年後には、「これがかかりつけ医のあるべき姿だと自信が持てるようになった」と話す。

高齢の患者と向き合うとき第一に考えるのは、家族が納得できる形で自宅で看取りができる環境



在宅1年目の患者さんと

を整えることだ。がんなどに伴う痛みを取り除く治療はもちろんするが、無理な延命治療は家族が望まなければいけない。「人は100%死ぬ。それは生活の一部であり、医療が支配する場面でもない」が持論だ。

中でも、進行性大腸がんで重度の認知症と心臓病も思い、86歳で亡くなった男性の看取りが、強く印象に残っている。男性は平成17年に大腸がんが発覚し、余命は長くないと宣告された。同年末、循環器科の医師から心臓ペースメーカーのバッテリー交換を指示されたが、判断のできない本人に代わって家族が話し合い、これを拒否することに決めた。本人夫婦をはじめ、孫まで含んだ2家族9人は近隣の温泉ホテルに6回も一泊旅行をくり返し、思い出づくりに励んだ。

在宅1年と2年の節目には、祝いの席に招待され、一緒に酒を酌み交わした。長くないとされた余命の宣告から3年を超えていた。男性が亡くなった後、来院した家族から感謝の気持ちを伝えられ、「本当にうれしかった」と当時を振り返る。患者の家族に招待されるということは、厚い信頼関係を築いている何よりの証拠だろう。

安心して死ねる町づくり

「在宅医療は全てが慢性疾患なので、今後どうなるかが予見出来る。亡くなるときは本当に静かに息を引き取っていく。ただ、自宅での看取りをしたことがなく、心配する家族も多い」。まだまだ自宅での看取りが定着していないこともあり、家族に対しては、常に丁寧な説明を心掛けている。

死亡者数が増加する「多死時代」の到来を控え、「病院でやることがないと見離された人はどこ

に行くのか。介護施設では看取れなくて病院搬送しているのが現実。なんとかしないと看取り難民、が増加する」と危機感を抱く。

対策として、地域のかかりつけ医が自分の患者は看取れるようになることが重要だと考えている。一方で、「かかりつけ医は介護も医療も入り交じっている。線を引くことはできない。病院については分からないことなので、医者も意識を変えていかないといけない」と医師側の意識改革の必要性も訴える。

仕事は診療所での診察や在宅医療だけではない。平成13年からは小中学校の学校医として児童・生徒の健康管理や健康相談に尽力。豊富な経験と温厚誠実な人柄で子供たちや保護者からの信頼も厚い。養護学校では障害者の健康管理にも貢献し、卒業後の在宅医療につながっている。

現在、横須賀市が主催している医療、介護、福祉、行政が集まる在宅療養連携会議では、在宅医療や看取りの支援について具体策を提案し、安心して死ねる町づくりの実現に貢献している。今後については「医者は75歳までかな。すんなりすぐにやめるわけにはいかないかもしれないけれど、(地域医療についての)教育、普及、啓発の方に力を入れていきたい」と医療の先を見据えている。(田中俊之)



疲れを感じさせず、精力的に診療に向向く

地域が1つの病院のように

小鳥 輝男

(滋賀県)



(安元雄太撮影)

おどり・てるお 小串医院院長。昭和20年生まれ。68歳。京大医学部卒。京大医学部付属病院勤務を経て、米国ハーバード大学医学部留学。福井医科大学医学部付属病院放射線科助教授を経て、平成3年に小串医院副院長。滋賀県医師会副会長などを歴任。診療科は内科、外科、小児科、放射線科。



患者宅では、笑顔と冗談で盛り上がる

琵琶湖の東南に位置する滋賀県東近江市。近江商人ゆかりの五個荘地区では、白壁が立ち並ぶ蔵屋敷の足下を掘割りが縦横に走り、ニシキゴイがゆったりと泳いでいく。

風情のある町並みを、小串医院の小鳥輝男院長は自ら車を運転して訪問先に向かう。この日は外来診察の後、午後から幼稚園・保育園へ定期健診に訪れ、その後、在宅患者の訪問に回った。

保育園では、子供の背丈にあわせて腰をかがめて診察。園児にお礼を言われると、自身も深々と頭を下げて言う。

「はい。ありがとうございました」

ひょうひょうとした様子が時折、厳しくなる。「この傷、どうした？ 落ちた？」「ちょっと、ぜーぜー聞こえるなあ。喘鳴^{ぜいめい}プラスや」

患者の信頼は絶大だ。訪問診療先では、事故で半身不随になった男性(59)の沈みがちな様子を思いやり、冗談を交えて診察する。男性の家族は「私たち『おまつり先生』って呼んでいます。いつも

冗談ばかりで暗いところがない。話しやすいんです」と笑顔を見せる。

職種の上下を超えて

東近江地域の医療、介護、保健福祉の連携ネットワーク「三方よし研究会」の立ち上げに尽力した。三方よしでは、近江商人の「売り手よし、買い手よし、世間よし」にちなみ、「患者よし、医療機関よし、地域よし」掲げる。



自身でハンドルを握って健診や訪問診療に出かける

会員は医師、看護師、歯科医師、保健師、薬剤師、管理栄養士、社会福祉士、介護福祉士、ケアマネジャー、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、行政職など400人超。成功のカギに「小鳥医師の人柄」を挙げる人は多い。会員の1人はこう言う。「ええ話なら、ちゃんと聞いてくれる人。だれが言ったかは関係ない。『三方よし』が広がったのは、小鳥先生がいたから」

しかし、小鳥医師は控えめだ。「僕は潤滑油的な存在。代表してもらっただけで、赤ひげ大賞は三方よしの会員がもらったものと思っています」

月1回の定例会には100人超が集まり、職種、上下の関係なく、車座で熱いディスカッションを繰り広げる。この日、小鳥医師のグループでは、1人の栄養士がこう発言した。

「患者さんの退院後の生活で、今は栄養のことが後回しになっている。患者さんが退院する際に開かれるケア会議で、ヘルパーさんに栄養の視点

を伝えられるといい」

低栄養は、高齢者の要介護リスクを格段に高める。だが、医療職、介護職の間でも、しばしば忘れられがちだ。

小鳥医師がうなずいて加勢する。「栄養の観点もいるなあ。こういう患者さんをほっといたら、いかん」

意を強くして、栄養士は病院長らに、こう訴えた。

「先生方の所だけでも、退院支援のアセスメントに栄養士を加えてほしい。在宅のヘルパーさんに、口腔ケアや栄養の視点が伝わるだけでも意味がある。できれば、もっと栄養士を雇ってくれる先生が増えるといい」

医療界は大抵、医師を頂点にしたピラミッド構造だ。だが、三方よしでは、専門職が大病院の院長にも意見を言い、それを医師も歓迎するムードがある。小鳥医師は「(職種を超えた)関係ができるまでに5年くらいかかりました」と振り返る。



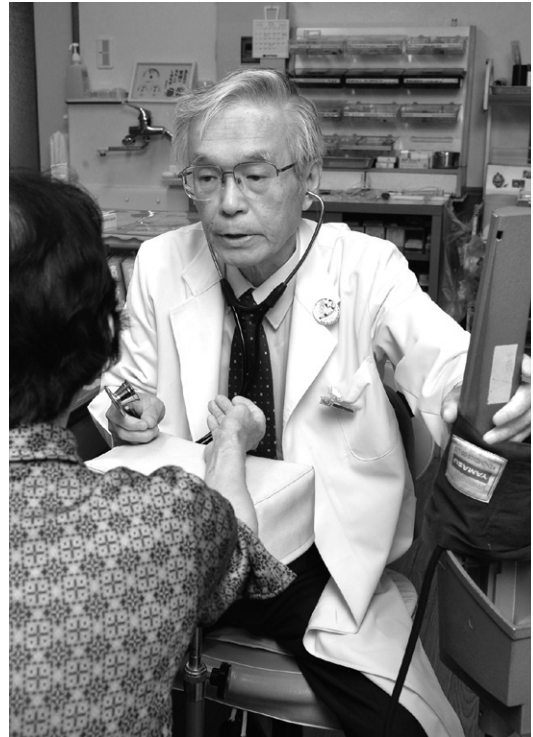
1カ月に1回開かれる「三方よし研究会」。上下関係のない「車座」が鉄則

地域の扇の要は

三方よしができる前の医療連携について、市の関係者は「クモの巣状態でした」と話す。病院の役割が不明瞭で、患者は「大きい病院ほど安心」だった。大病院がどんな病気も扱うから、在院日数が長引き、新規患者の受け入れは遅れがちだった。全国を見渡せば、そうした地域は今も珍しくない。

ただ、この地域には「みんなで協力して患者さんに対応したいというマグマみたいな力があった。特に、病院や施設のリハビリ職が熱心でした」と小鳥医師は話す。地域医療を潮流にするキーパーソンは、やはり開業医なのだろう。熱心な医療職の声を受け、行政とつなぐことができ、大病院にも直言でき、地元の事情が分かる。平成19年に三方よしスタートした。

顔の見える関係ができると、医療は変わる。会員らは「他職種の声を聞くことが、とにかく新鮮だっ



外来診療で一番大切なのは、顔と顔を見合わせること



患者が持参する「三方よし手帳」。脳卒中の地域連携パスから発展した



東近江保健所の職員らと、研究会の打ち合わせをする

た。あの患者さんが、こんなに元気になったと知って、やりがいも持てた」。会員は今や、電話1本で患者の容体や転院を相談する。お互いの信頼があるから、自信を持って患者に転院も勧められる。

患者を真ん中にして

なかなか退院できなかつたり、帰れなかつたりする患者もいる。三方よしではその理由も検討する。社会資源、施設の空きのなさ、患者・家族の理解、地域力。原因は何で、専門職は何ができるか。患者が途方に暮れないよう、地域が1つの病院のように機能するのが願いだ。

患者も変わった。「患者さんを真ん中に、医療や介護や保健福祉の専門職がみんなで支えていると気づいてもらえるようになった。それが、何よりもうれ

しい」と小鳥医師。

三方よしには、患者や要介護者と専門職が一緒に取り組むイベントもある。「東近江リハビリテーション風船バレーボール大会」。持ち場でチームを組んで優勝を争う。リハビリの一環だが、外出やイベントで意欲が引き出され、人とのかかわりが進む。それは地域での暮らしそのものだ。優勝杯は「オードリー杯」。小鳥医師にちなんで名付けられた。

三方よしの今後について、小鳥医師は「年を取っても、がんになっても、認知症になっても、安心して暮らせる町づくりを進めたい。それが地域包括ケアです」。徘徊する認知症の人の発見訓練も行われている。「仲間が多いので、もう少し広がりのある訓練ができないかと思っています。それをモデルに、滋賀県に殴り込みをかけようと思って」。「えへへ」と、いたずらっぽく笑った。 (佐藤好美)

家庭問題から子育てまで

大岩 香苗

(兵庫)



(松永渉平撮影)

おおいわ・かなえ 医療法人大誠会大岩診療所院長。昭和33年、兵庫県生まれ。56歳。鳥取大学卒業後、岡山大学医学部第一外科や岡山済生会総合病院、半田外科病院(現・医療法人天馬会半田中央病院)の勤務を経て、63年1月から現職。

「少しでもお役に立てるのであれば、やってみようかなという軽い気持ちでした。最初は『2年間だけでいい』といわれたんです」

岡山県に隣接する兵庫県上郡町にある大岩診療所院長の大岩香苗医師は、地域住民の健康を守り続けてきた「頼もしき存在」である。

医師になろうと思ったのは小学生の時。外科医だった父親の影響が大きかった。「医院の奥が自宅になっていて、ある日、事故の患者さんが運ばれてきたのを見たのです。痛がる患者さんに処置する父親が格好いいというか、子供ながらにすごいなと思いました」

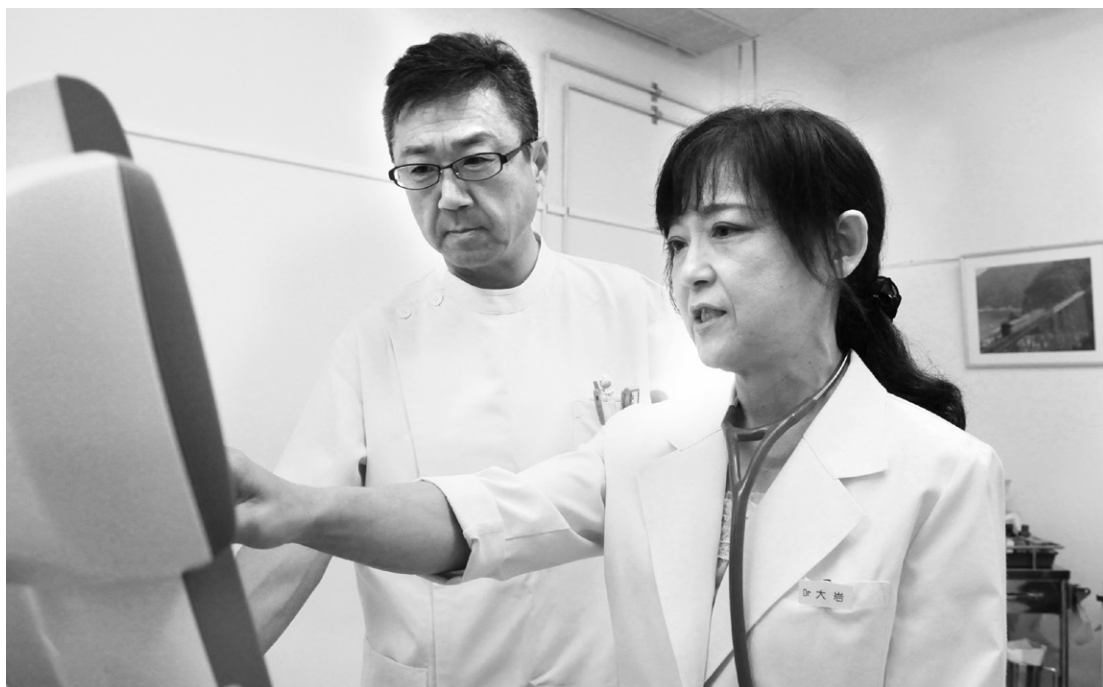
大学卒業後、病院勤務を経て、実家である相生市の外科病院に戻った。大学の同期だった外科医の敏彦さんと結婚し、子供にも恵まれた。上郡町に開業したのは、そんな昭和63年1月。卒業後6年足らずの若さだった。「大学に戻るつもりで、開業なんて全く考えていなかった」と振り返る。

方針転換したのは父親の意向だ。当時、上郡町には入院施設のある医療機関もなければ、外科医もいなかった。「父が町の方々から『診療所を作ってくれへんか』と要望されて。父は私が暇そうにしているとでも思ったのでしょう。『お前、せえへんか?』となったのです」と笑う。

珍しかった女性の外科医

夫や父の病院のバックアップを受けたが、1人でのスタートだった。「当直医がいるということで『いつ行っても診てくれるらしい』という評判になってしまい、日曜日も平日並みに患者さんが来られる時代がありました」。今では懐かしい思い出だ。

女性の外科医というのは珍しい存在だった。患者からは「女医で大丈夫か?」と露骨に言われたこともある。だが、どこまでもアクティブだ。実家に子供を預けて夫と2人で手術を行うことも珍しくな



夫の敏彦さん(左)は、同じ外科医としても頼れるパートナーだ

かった。子供を身ごもった大きなおなかで救急車に同乗し、危篤患者の心臓マッサージをしながら総合病院に向かう経験もした。開業時から中学校の校医も務め、親たちに子供の健康管理のアドバイスを行ってきた。看護専門学校で講師として教壇にも立つ。

最大の理解者である敏彦さんの評価は高い。「僕は手術の時に手をちょこちょこ動かすので、妻から『もっと落ち着いてスパッと』といわれてました。結構、男らしいんです。僕から見ても勉強家だ。取れる資格は取るんだと意気込んでいます。どうも僕に負けるのが嫌なようだ」と敏彦さんは笑顔を見せる。

しかし、その持ち味は女医ならではの気遣いや細やかさにある。それが垣間見えるのが週1回の往診だ。自らハンドルを握り、10軒近くを回る。「おじいちゃんの面倒をよくみてきたよね」「折り紙づくりはまだやっているの?」。診察だけでなく、患者との世間話などコミュニケーションを重視する。そんな香苗医師に対して、高齢患者たちは「先生には親も診てもらいました。なくてはならない存在です」と両手を合わせる。

人付き合いの“達人”

女性患者にとっては、悩みを打ち明けられる貴重な相談相手でもある。「介護をされているお嫁さんが不眠や目まいで来られる。介護疲れや不仲もあったりして、『話を聞いてもらえてスツとした』という人もいます。私がかかできるわけではないが、聞くだけでもいいかなと思っています」

持ち込まれる悩みや相談は医療だけではな



やりがいは「患者との触れ合いです」と話す

い。仕事や家庭問題から子育てに至るまで、まさに町民の心の支えだ。敏彦さんが「妻は、地域の人たちの家族関係や悩みなど、とにかくよく知っています」と舌を巻くほどの人付き合いの達人でもある。

香苗医師は地域医療のやりがいは「患者との触れ合いや信頼関係です」と語る。「開業当時、私のことを娘や孫のように思ってくれた年代が亡くなり、今はその子供さんを診るようになった。世代が替わっていくのを見ているわけで、『おばあちゃんの時もこうだったね』などと思い出話をするんです」

入院ベッドでは自問自答

2～3年のつもりが、あっという間に歳月が流れた。平成5年にはベッドを19床にまで増やし、夫の敏彦さんも同診療所の専従として働くことになってからは、さらに仕事に励んだ。「大きな病院に劣らない手術ができるようにしよう」。これが2人で確認した診察のモットーだった。正月も夜中もなく手術を行った。

そんな診療所に転機が訪れた。夜中に、近くの国道で発生したトラック同士の事故だった。残念なことに、すでに死亡した状態で運転手が運び込まれてきた。きれいに清拭をしてあげることしかできなかった。

翌日駆けつけた運転手の妻の一言に2人は無力感に襲われることとなる。「『何で主人はこんな小さな診療所におるんですか』といわれたのです。家族にしてみれば当然のことだと思うのですが、もっと大きな病院であればどうにかなのではないかという期待と後悔があったのでしょうかね」。悔しかったが、どうしようもなかった。

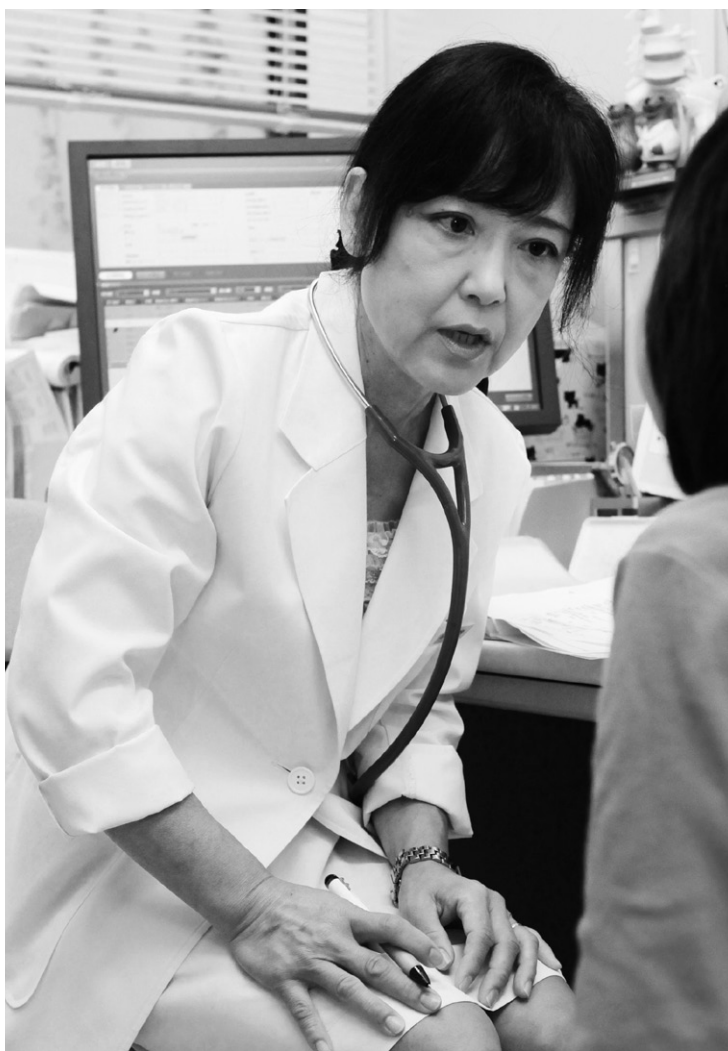
ちょうどその頃、専門医制度ができた。しかし、症例が足りずに外科の専門医の資格が取得できなかったこともあって、2人で出した結論は入院患者の受け入れをやめることだった。代わりに、患者の要望が多かった耳鼻科と皮膚科を開設した。平成18年、20年近く守ってきたベッドが静かに消えた。

子供たちが大きくなった今、改

めて診療所の行く末を考えるようになった。人口減少と高齢化の波が押し寄せる上郡町が、これからどうなるかにも考慮しなければならない。

気掛かりなのは入院ベッドのことだ。「やめずに有床診療所として持ち続けたほうがよかったのでは」と、いまだに自問自答を繰り返している。

夫との二人三脚で切り盛りしてきた診療所は、いまや地域住民にとって「なくてはならない存在」となった。「2人が健康なうちは、やれるだけのことはやろう」。期待に応えるべく、その目はどこまでも住民の暮らしに向けられている。（河合雅司）



女性患者たちの悩みにも耳をかたむける



往診先では、患者との会話を欠かさない



患者たちの世の移り変わりを見守ってきた

「介護と医療」を一つに

白石 吉彦

(島根)



(宮川浩和撮影)

しらいし・よしひこ 隠岐広域連合立隠岐島前病院院長。昭和41年、徳島県生まれ。47歳。自治医大卒。徳島大医学部付属病院、国民健康保険相生診療所(徳島県)などの勤務を経て、平成10年から島前町村組合立島前診療所(現・隠岐島前病院)に。13年から院長を務める。



外部で研修を受けた職員による勉強会を開き、学んだ内容を共有する

鳥取・境港からフェリーで2時間40分、日本海に浮かぶ人口3千人の島、西ノ島。島唯一の病院は、周辺の2島を合わせて6500人の健康を担う。

「この島に救急車のたらい回しはないです。たらい回しするところがありませんから」

現れた白石吉彦院長は、半袖の白衣姿で楽しそうに笑う。離島の医療を一手に担う隠岐島前病院の白石院長が、縁もゆかりもないこの島に来て

16年になる。

赴任から4年目、若干34歳で院長に^{ぼってき}抜擢されたときは戸惑った。断り切れず10年以上が経過した今も、離島の医療を引っ張ってきたという意識はない。「ひとりよがりの医療にならないことが大事だからね」

患者がいて、スタッフがいて、支えてくれる島の住民がいる。モットーは「医者が偉くない病院」。時には看護師から叱られることもある。偉ぶらず、楽しそうに働く白石院長に、専門は何かを聞くとその目が輝いた。

「総合医です」

治すだけではダメ

高校までは、徳島県で育った。小学生の頃は大工に、中学生の頃は羊飼いにあこがれた。高校時代に合った夢は「旅人」。



島唯一の病院

「旅人になったらお金を使う一方だよな。手に職をつけないと」

手に職をつけてくれるばかりか、卒業後は就職先まで面倒を見てくれる自治医大の存在を知り、落ちるつもりの入試に合格。医学生をしながら、アルバイト、二輪車、ダンスと充実した学生生活を送った。

卒業とともに、ダンス部の後輩だった裕子さんと結婚。故郷の徳島で働きながら別居婚を送った後、裕子さんの故郷である島根県に。「1年間、頑張れよ」と送り出された先が西ノ島だった。

赴任してすぐ、肺炎の80代の男性患者を診た。人工呼吸器が必要で、本土の病院に搬送されてもおおしくない状態だったが、懸命な治療で回復。しかし、退院から1カ月後、男性は施設で寝たきりの生活になっていた。

「あんなに頑張って治したのに、自分の仕事はなんだったのだろう」

治して帰したはずの患者が幸せに暮らせてい

ない。病気を治すだけではダメなんだ。介護と医療がひとつになった地域包括ケアの実現に向け、白石医師の挑戦が始まった。

退院が近い患者を家に帰していいか。在宅介護で困ることはないか。現場にいるヘルパーと病院職員が共に患者のケアを考える「サービス調整会議」を立ち上げた。会議は月2回、16年間続いている。

これまでは1年ごとに替わっていた医師が根付いたことで、院内の雰囲気も変わった。薬剤師や栄養士、理学療法士など他職種で情報を共有するのが当たり前になった。誰かが外部で研修を受ければ、すぐ勉強会を開いて学んだ内容を皆に伝えてもらう。

「これは明日から病院で実践できるね」

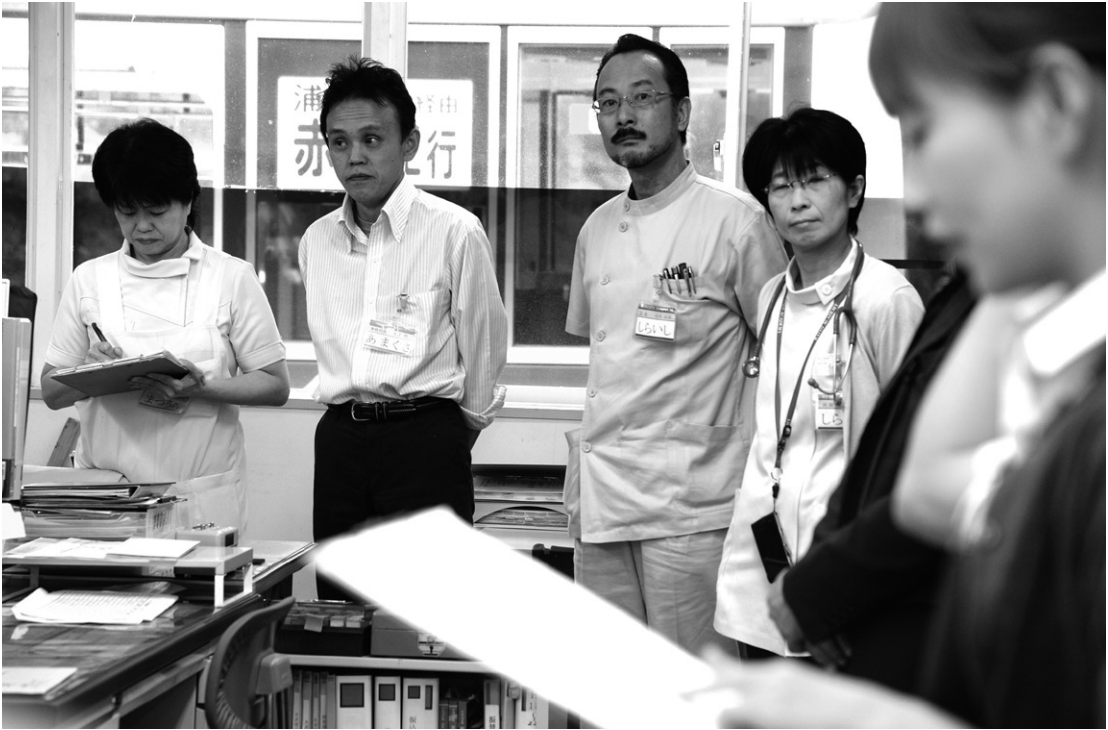
積極的な意見交換は時に、夜まで続く。

エコーから手術まで

午前8時。病棟には1時間以上かけて44床を回



若い医師たちも、ここで鍛えられ育っていく



スタッフが集まり情報を共有する朝のミーティング

診する白石院長の姿があった。東京の病院から研修に来ていた看護師が「東京ではありえない長さです」とつぶやく。「先生は医者としてどうありがたいかに正直なだけ。ここにいると私も看護師でありたいという原点がぶれないんですよ」と松浦幸子看護師長が言葉を添える。年間100人もの医学生や看護学生が研修させてほしいとやってくるのも、「僻地医療」のイメージを覆す現場に学ぶことが多いからだろう。

回診後は、^{ぼうこう}膀胱エコー、ブロック注射、皮膚がんの切除手術を次々こなす。できることは何でもやるのが離島の医療。赴任2年目の遠藤健史医師は「どこにでもエコーを当て、どこにでも針を刺す。最初は驚きました」と苦笑する。まずは診る。その上で詳しい検査や治療が必要となれば、本土の病院を紹介するのが基本だ。

「総合医ってかっこいいと思ってほしい。医者のお半分の人が総合医になったら、日本の医療は変わるだ



患者とじっくり対話する



「海のあるこの島の暮らしが楽しい」という

ろうね」。どんな患者も診てきた自身の経験は、発生から2日後に現地入りした東日本大震災の被災地でも生きた。

予約の時間に来ない患者には電話を入れ、時には往診にも押しかける。施設へ往診に向かう道すがら、住民が「先生、元気?」と声をかけてきた。診察だけでなく、地域のまつりに参加するなど、積極的に島民と交流してきた証だ。

楽しいから続く

決して仕事一辺倒ではない。「全力で頑張りが続けば続くわけがない。楽しいから続いているんだよ」と白石院長。しかし、僻地医療が楽しいなら、なぜ全国で医療過疎が進むのか。

離島に赴任した医師の`三大障害、は、パートナー、子供の教育、親の介護だと白石院長は分析する。白石家の場合、妻の裕子さんは近隣の町立浦郷診療所長として診療をこなしながら4人の子供を育てるスーパー女医。院長が「生まれ変わっ

ても(裕子さんを)探して結婚する」とのろけるのも無理はない。

地域には高校が1カ所しかなく、大学はない。子供たちが今後、どんな道を選ぶのか。先のことは分からないが、今のところは「もうちょっとやろう」と思っている。「だって、楽しいことをやりたくてここに来たんだもの」

「ホワイトストーン(白石)」と名付けた船で日本海を旅するなど、島にいるからこそその家族の思い出も増えた。それができるのも、医師の「複数制」を取っているからだ。

徳島の山奥の診療所に先輩と勤務していたとき、「ひとりで何もかもやるのは無理。教え合い、助け合いながら続けることが大切なんだ」と知った。島前病院と近隣の診療所の医師を交代で診察に当て、島外の学会や研修会にも積極的に出席させる。病院の質を決めるのは看護のレベル。看護力の底上げにも余念はない。

「ぼくはドクターコートじゃない。`チーム島前病院、の一員です」
(道丸摩耶)

第3回「日本医師会 赤ひげ大賞」

● 推薦概要 ●

日本医師会

赤ひげ大賞

主 催	日本医師会、産経新聞社
後 援	厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
特別協賛	ジャパンワクチン株式会社
対 象 者	日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師。 ただし、現職の都道府県医師会役員は除く。原則として、70歳未満の方を優先。
推薦方法	各都道府県医師会会長が1名を推薦
推薦基準	<ul style="list-style-type: none">●過疎の医療現場、特に医療資源の乏しい地域や交通が不便な地域、離島などで、住民を支えている医師●障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるような活動を行っている医師●地域における学校保健活動、公衆衛生活動を通じ、特段に地域住民の健康管理を推進している医師●医療環境整備や社会活動を通じてまちづくりへ貢献している医師
受賞発表	産経新聞紙上
選 考	日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定
副賞と賞金	賞状、記念盾および副賞100万円

● 経過報告 ●

日本医師会常任理事 石川 広己

大賞受賞者の皆様、おめでとうございます。

第2回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考経過のご報告並びに講評を述べさせていただきます。

選考経過のご報告ですが、第2回「日本医師会 赤ひげ大賞」は、昨年5月7日に日本医師会より都道府県医師会宛て推薦依頼文書をお送りし、31の医師会からご推薦いただきました。

選考会は、8月30日、日本医師会館において行いました。厚生労働省医政局長の原徳壽様、昭和館館長／宮内庁参与の羽毛田信吾様、宇宙航空研究開発機構特任参与の向井千秋様、タレントの山田邦子様、作家の小林光恵様、産経新聞社専務取締役の外山衆司様、同じく産経新聞社論説委員の河合雅司様、それに日本医師会役員が加わり、11名で慎重に選考させていただきました。

その結果、ご案内のように、5名の大賞受賞者が決定し、3月19日に公表され、本日の表彰式を迎えることになりました。

ここに、発表に至るまでの選考の概要を報告し、本日受賞されました皆様に心よりお祝いを申し上げるとともに、ご推薦いただきました都道府県医師会、更には、特別協賛いただきましたジャパンワクチン株式会社、ご後援いただいた厚生労働省など、本賞にご支援賜りました多数の方々に感謝を申し上げます。経過のご報告とさせていただきます。

引き続き、選考の講評を述べさせていただきます。

赤ひげ大賞では、選考対象として、「過疎の医療現場、特に僻地^{へきち}や辺地、離島などで、住民を支えている医師」「障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるような活動を行っている医師」「地域における学校保健活動、公衆衛生活動を通じ、特段に地域住民の健康管理を推進している医師」「医療環境整備や社会活動を通じてまちづくりへ貢献している医師」などを掲げておりましたが、各都道府県医師会よりご推薦をいただきました31名の先生方はすべて、本賞に値する素晴らしい活動を地域で続けてこられた方々ばかりであり、選考には困難を伴いました。

そのような中、特に選考委員の目を引きましたのが、今回受賞されました5名の先生方でありました。

北海道の下田憲先生は、医療資源の乏しい地域で、24時間献身的に医療活動を行い、地域住民の健康を支えていらっしゃいます。

神奈川県の野村良彦先生は、外来診療と、在宅医療を切れ目なく移行できるよう、地域完結型医療を目指し、医療環境整備に努めておられます。

滋賀県の小鳥輝男先生は、地域での多職種連携の主導を担い、常に、患者さんにとって最善の方法を模索しておられます。

兵庫県の大岩香苗先生は、女性医師で外科医という貴重な存在として、高齢化率の高い同町の方々に不安のないよう地道な努力を続けていらっしゃいます。

鳥根県の白石吉彦先生は、離島における唯一の病院の院長として、離島にいても、本土と同レベルの医療・看護を住民に提供したいと尽力されておられます。

5人の方に共通しているのは、病気だけを診るのではなく、患者さんやそのご家族が暮らしている地域まで診ているということであり、現代の赤ひげ先生の心意気に大変感動いたしました。高齢社会を迎え、往診、在宅医療、看取りなど現場の先生方のご苦勞は絶えないこととお察ししますが、受賞された先生方を始め、多くの先生方が、各地域で日本の医療を支えていらっしゃいます。

本赤ひげ大賞が、そのような先生方の励みとなり、第2、第3の赤ひげ先生がそれぞれの地域で地域医療の充実にご尽力いただけることを願っております。ありがとうございました。